

マイスターだより

川西町立小松小学校
令和8年10月8日（木）No.30
文責：情野 夏美

二井先生！小研ありがとうございました！

二井先生に小研を行っていただきました。子ども達の学びが深まるような深い教材研究をされていたり、授業中の温かで励みになり、核心に迫る声かけが行われたりと、学ぶことが多い授業でした。参観された先生方の感想をまとめたものをお伝えします。

6年1組 国語科 作品の世界を想像しながら読み、考えたことを伝え合おう
「やまなし イーハトーヴの夢」

視点1「自分で学びを進める子ども」について

- 一人学びの時間の確保により、自分の考えを整理する時間が各所にあったのがよかった。
- 基本のめあてをもとに、自分のめあてを作ること、自分事とする手立てになっている。
- 自分のめあてを立てさせる、一人か友達か選んで活動するなど、自分で自分の学び方を決定する場面がたくさんあった。自分なりにアレンジできる余白があったことで、誰一人取り残されず、活動に入れる工夫だと感じた。
- 本時の流れやゴールを児童と共有して、見通しを持たせている。
- 並行読書の実施により、「宮沢賢治を学んでいる」という環境づくりになっている。
- 学習の内容に合わせて、数種類のシンキングツールが使い分けられていてよかった。児童にとって読み取りのサポートになったり、分かりやすく整理したりできるように工夫されていた。
- 説明が分かりやすく、すぐに学習を進められていた。「どうするんですか？」の声がない。
- 学び方を途中で変えることで、より深い学びになっていた。
- 授業中何度も「結局、宮沢賢治はどんなことが言いたいのか。」と教師から出てきていたため、この時間で考えることからそれずに活動することができていたと思う。
- 自分の考えを整理するために、ロイロで宮沢賢治の3つの視点に沿って考えることができていたため、わかりやすく考えを整理することができていた。
- 自分がこれまでの学習で線を引いた部分から引用していたため、既習を生かした学習になっていた。
- 自分の考えをまとめる時間と友達と考えを共有する時間のメリハリがあり良かった。



視点2「課題や疑問を解決するために対話する子ども」について

- モニタリングの時間の設定。何度も設定されていたので、友達の考えに触れる機会が確保されていた。
- 途中経過で、ヒントとなった3名に発表させるのがよかった。書けない子も書け

るようになる、よい手立てだった。

○シンキングツールや付箋の色が指定しており、引用や要約の仕方をさっと確認していた。児童が交流のしやすさ、必要感を持っていた。

○対話の場面が設けられ、様々な考えを児童が共有していた。

●3つの視点それぞれについて、自分と考えの近い児童と交流したり、違う考えの児童とも交流させたりしてみたいと思った。→自分の考えの違う友達との交流を通して、別の視点からより賢治の作品を深く理解したり、たくさんの気づきが促されたりしたのではないかな。



その他

○ノートとロイロのハイブリットで、双方の良いところをどちらも使っていた。

○補助発問で、主題に迫っていく支援の在り方がよかった。

○ふり返りの中に自己評価欄があることで、児童の理解度を見取る目安となっていてよかった。

○困っている児童への声がけや、全体への指示、アドバイスが核心をついていた。

○ロイロの共有がよかった。友達と交流しつつも、多様な考えに触れることができている、考えの幅が広がっていた。まさしく他者参照だった。

○みんなで考えてみたくなる、価値がある問いのある授業だった。

○学習規律が素晴らしかった。

○単元を見通した教材作り、学習の足あとが残るプリントがよかった。

○タイマーで時間を区切らないのも、じっくり集中できていてよかった。

○宮沢賢治のメッセージを受け取り、考えるだけではなく、「対峙したら、自分は何を伝えたいか。」「令和の時代から」と考えさせることで、より深い学びが自分のものになっていくのだと思った。

○シンキングツールをととても効果的に使っている。ベン図で子ども達も考えるところが分かりやすかったと思う。

○生徒指導につながる子どもへの温かな声がけがあった。

○各自活動していても、全体を見て、ポイントを話している。子ども達は、自分に必要な情報をしっかりと聞いている。

○全員が書くことへの抵抗がない。

●ロイロ画面の共有をしていたので、少し時間を取って各自に読ませるよう声がけをしてもよかったように感じた。自分のカードを書くことで手一杯の児童が多かったようなので。



【前回の田林先生の授業と今回の二井先生の授業から学ばせていただいたこと】

- ・机間指導の在り方…来週の校内研全体会で詳しくお伝えします！
- ・核心に迫る問い、聞き返し、声がけ。
- ・いつでも教材文に立ち返る。
- ・ICTの力も借りながら。